

「戦後政治秩序の終焉」？

—二〇二三年一月オランダ総選挙—

水 島 治 郎

はじめに

「有権者はその意思を示したのだ。もう自由党を無視することは不可能だ」

二〇二三年一月二二日、オランダ総選挙の夜、ハーグのカフェで行われた自由党（P V V）の集会は熱気に包まれていた。開票速報によると、ヘールト・ウィルデルス率いる急進右派ポピュリスト・自由党の獲得議席は予想を大きく上回り、二位以下に大差をつけて初の第一党が確実となった。開票開始後、獲得予想議席は三五議席とされていたが、これは最終的に三七議席に伸びた。この三七議席という数字は、自由党の最高記録（二〇一〇年の二四議席）を大きく上回ることはもちろん、前回（二〇二二年）、前々回（二〇一七年）の第一党（いずれも自由民主人民党（V V D））の獲得議席をも上回った。獲得票数は二四〇万票を超え、オランダの全自治体三四二のうち二五〇を超える自治体で第一党の座を占めた。自由党の圧勝だった。長年にわたり野党暮らしを強いられしてきた党首ウィルデルスは開票速報を受け、冒頭の発言とともに、感極まって次のように述べている。「私の政

治家人生で最高の日だ」。

そこで本稿は、このオランダ総選挙について、なぜ急進右派の自由党が第一党というオランダ政治史上前例のない結果を生むことになったのか、その背景と政党政治の展開、有権者の動向に注目して分析する。またそれと併せ、選挙後の各党の動きと連立政権形成に向けたプロセスについても、可能な限り追うこととしたい。

選挙結果について

表1 2023年11月オランダ総選挙結果(議席数)

自由党 (PVV)	37
左派統一リスト	25
自由民主人民党 (VVD)	24
「新しい社会契約」(NSC)	20
D66	9
農民市民連盟 (BBB)	7
キリスト教民主アピール (CDA)	5
社会党	5
動物党	3
民主フォーラム	3
キリスト教同盟	3
デンク	3
(その他)	3
総議席数	150

はじめに選挙結果についてみてみよう。オランダの下院は総議席一五〇議席を比例代表制で政党が争う形をとるが、そのさい、最後の一議席まで政党に配分する「完全比例代表制」を採用しているのが特色である。政党の議席獲得に必要な最低得票率は設けられておらず、わずかに〇・六七%程度の得票率で議席を獲得することが可能である。すなわちオランダ全体で有効投票総数が一〇〇〇万票であれば、七万票程度の得票で一議席を獲得し、議会に議員を送ることができる。近年は、この参入障壁の低さを活用する形で新党、小党の進出が顕著にみられ、多

党化が進んでいる。二〇二三年選挙でも二六党が参加し、一五党が議席を獲得した。

具体的な議席配分は表一の通りである。投票率は七七・八%であり、前回、前々回を若干下回った。

ふだん国際的な関心の対象になることの少ないオランダ政治だが、二〇二三年一月の総選挙結果には世界の注目が集まった。ウィルデルス自由党の大勝について、国内メディアはもちろん各国のメディアが大きく扱い、衝撃の強さを示している。特に自由党がコーランやモスクの禁止を主張し、EU脱退を訴える急進右派政党であることは広く報じられた。そもそも近年のヨーロッパ諸国では、二〇二二年にスウェーデン総選挙で急進右派政党・スウェーデン民主党が保守第一党に躍進して閣外協力により右派連立政権を誕生させ、イタリア総選挙では急進右派政党「イタリアの同胞」が第一党となり、党首のジオルジャ・メローニを首班とする右派連立政権が誕生するなど、「右旋回」が指摘されている。そして今回、かつて移民・難民に寛容とされたオランダで自由党が第一党となったことで、反移民、反難民、反EUを掲げる右派ポピュリズムの波がヨーロッパを覆うのではないかと、との懸念が広がったのである¹⁾。

総選挙に至るまで ― ルッテ (リユテ) 政権の崩壊

さて今回、前回の総選挙 (二〇二一年三月) から二年八カ月という短期間で選挙が実施された理由は、それまで一三年続いたルッテ政権が崩壊し、内閣が総辞職したことである。二〇二三年七月七日、ルッテ首相は閣内不一致を理由に内閣総辞職を国王に申し出、これにより四党連立政権が崩壊し、一月に総選挙が行われることになった。しかも誰もが驚いたことに、ルッテは自らが総選挙に出馬しないこと、選挙後は政界を離れることを明言し、情勢は一気に流動化した²⁾。

内閣崩壊の直接の原因は、難民政策をめぐり与党内に亀裂が生じ、閣内不一致が深刻化したことである。前年（二〇二二年）にオランダに入国した難民申請者は、シリアやアフガニスタンなどからの入国者を中心に、コロナ禍以前の二〇一〇年代末の水準を大きく上回り、総計四万六〇〇〇人を超えた。

この難民申請の大幅な増加は、もともと十分とは言えないオランダの難民受け入れ態勢を強く圧迫した。オランダでは、フローニンゲン州にあるテル・アペル難民センターが難民申請者の手続きを行う場所と定められてきたが、来訪者数の急増に対応することができず、付近で屋外に寝泊まりする人が多数生じ、衛生状態が悪化した。貧弱な受け入れ態勢への批判が高まったことは当然として、他方で地域住民の中には、難民センターそのものを問題の発生源として、即時閉鎖を要求する動きも出てきた。

各方面から批判が高まり、苦しい状況に追い込まれたルツテ政権では、難民対応をめぐり連立与党に鋭い亀裂が走る。ルツテ首相と彼を支える自由民主人民党は、難民の家族について入国を制限する歯止め策を提示し、これに連立与党のキリスト教民主アピールも賛同する。しかし中道左派の連立与党、D66とキリスト教同盟は、移民・難民政策に相対的にリベラルな姿勢をとっており、難民の家族入国を制限する提案に強く反対した。四党間の協議は決裂し、ルツテ首相は内閣総辞職を表明した。そしてルツテは政界引退を決断したのである。

内閣崩壊の経緯からして、総選挙の有力な争点の一つが難民問題となることは自然な成り行きだった。そして自由民主人民党にとってこのことは、必ずしも不利といえなかった。確かに自由民主人民党は、ルツテという選挙の「顔」なくして選挙に臨む必要があった。しかし他方で「移民・難民に厳しい党」としてのイメージを掲げて選挙戦を戦うことで、移民・難民をめぐり硬化している世論を背景に、支持を伸ばせるのではないかとという期待があったのである。その意味で今回の選挙は、難民問題を契機に解散・総選挙という筋書きを描いたルツテ首

相の「置き土産」という面もあった。

そして自由民主人民党は、ルツテの後継者としてトルコ系女性のイエシルフースを選定し、彼女を筆頭候補者として擁立して選挙戦に臨む。自由民主人民党は、一三年にわたり第一党としてルツテ首相を支えた政党だったことから、ルツテの後継リーダーは首相の座を狙う本命候補と目された。その結果、オランダ史上初の女性、初の非ヨーロッパ系マイノリティ出身の首相が誕生するという期待が、否が応でも高まった。

混迷する選挙戦

しかしそうは問屋が卸さなかった。自由民主人民党の行く手には、前回二〇二一年選挙の時には存在しなかった、いくつもの新勢力が立ちふさがったのである。

一つめの新勢力は、新たに結成された統一左派リストである。ルツテ退陣表明を踏まえ、労働党とグリーンレフトの二党が結集し、政権獲得を目指して総選挙に合同リストで臨むこととなった。その背景にあったのが、労働党の決定的な退潮だった。オランダの社会民主主義の栄光ある歴史を一身に背負い、世紀転換期には欧州社民「第三の道」の担い手、ウイム・コック首相など著名人を輩出した労働党は、二〇一七年選挙以降、獲得議席が一桁に落ち込むなど大敗北を喫しており、党としての存立を危ぶむ声が上がっていた。他方、当初は小党に過ぎなかったグリーンレフトは、気候変動問題に敏感な若者層などの多様な支持を得て拡大し、労働党と立場を逆転させていた。この状況で両党は、「グリーンかつソーシャル」を旗印に合同リストを作成し、政権獲得を目指して十一月選挙に臨むこととなり、事実上の左派新党の結党に踏み出したのである。

さらに新鮮な驚きを呼び起こしたのは、統一リストの首相候補者として白羽の矢が立ったのが、欧州委員会副

委員長を務めたフランス・ティメルマンズだったことである。労働党出身の大物政治家であり、欧州委員としてEUの環境政策、特に気候変動対策を中心となって進めたティメルマンズは、国際的な知名度を誇り、しかも労働党とグリーンレフトの双方の支持者に訴求力を持つ稀有な立ち位置にあり、統一左派リストの筆頭候補者として最適の人材と思われた。

こうしてそれまでの左派の「分裂」を克服し、かつインパクトある「顔」を前面に出すことに成功した統一左派リストは、左派の新たな姿を示すものとして注目を集め、一時は支持率トップを走ったことで、久々の左派による政権奪還の期待が高まった。なお統一リストの選挙綱領は、両党の協議を経てまとめられ、高所得者や大企業への課税強化、気候変動への対応など、両党の主要政策をいずれも含むものとなった。

二つめの新勢力は、ピーテル・オントツイヒトが個人で立ち上げた新党「新たな社会契約」(NSC)である。彼はもともとキリスト教民主アピールに属し、議会経験の長いベテラン政治家であるが、自党が与党であっても政府批判をためらわず、弱者に寄り添う姿勢が広く共感をよび、キリスト教民主アピール所属時から党内に高い人気を誇っていた。彼は逡巡の末、新党を結成して一二月選挙に参加することを決断したが、数十議席の獲得が予測された後になって候補者選定を始めるというにわか仕立てぶりだった。行政改革、憲法裁判所の新設、市民の生活保障などの政策を掲げ、既成政治からの転換を訴え、選挙の台風の目となった。

なお、比較的新しい政党である農民市民運動(BBB)の動向も注目された。同党は二〇二三年春、上院選を兼ねる州議会統一選挙で第一党に躍進しており(上院総議席七五議席中一六議席を占めた)、当初は総選挙で第一党を窺うとの見方もあった。この農民市民運動は、政府による環境規制の強化、特に窒素排出規制により農民が重い負担と廃業を迫られていることに正面から反対し、大都市優先の既成政治を批判するなど、独自の角度から主

張を訴えたことで注目を集め、既成政党を脅かした。ただ、二〇二三年の夏から秋にかけて、「新しい社会契約」の支持拡大と裏腹に農民市民運動への支持は低下し、下院第一党に手が届く可能性はなくなった。しかしながら、上院の最大会派を有する農民市民運動は、連立交渉の際に重要なカギを握ることが予想された。

いずれにせよ、ルッテ首相の引退表明で空白状況が生じ、その空白を埋めるべく新たな政治勢力の参入と再編がダイナミックに進行したことで、自由民主人民党の優位は自明ではなくなる。三党、すなわち自由民主人民党、統一左派リスト、「新しい社会契約」のいずれが第一党の座を手にするのか、明確に予測できる者はだれもおらず、情勢は混沌とした。

なお本番で第一党となる自由党についてみれば、一月選挙に至る期間中、注目が集まることは少なかった。予想獲得議席はせいぜい二〇議席弱だった。第一党の座を狙う前述の三党の後塵を拝し、第四党の座に収まるのがせいぜいと思われていたのである。

このような視界不良の状況で、一月二二日、オランダは投票日を迎えた。

ただ、実は投票日直前に世論の風向きが若干変わっていたことは、多くの人が感じ取っていた。それは自由党の支持拡大である。投票日近くになって行われた党首討論会などでウィルデルスが「柔軟な」姿勢を示し、コラン禁止やモスク禁止といった年来の急進的な主張を和らげる姿勢を示唆したことが、ウィルデルスが「現実路線」に転じたとして評価されたとみられている。この変化を受け、選挙予測を行う各社は自由党の予想獲得議席を上方修正し、投票前日の時点で、一六一―一八議席ではなく二八議席程度にまで引き上げていた。そしてこの支持率上昇により、自由党が他の政党と並んで第一党の座を窺うところまで達したことを、各社は掴んでいた。

そのため、投票日前日の時点で見れば、第一党の有力候補として自由民主人民党、統一左派リスト、「新しい

社会契約」の三党に自由党が加わり、この四党による文字通りの混戦模様となっていたのである。

選挙結果の「衝撃」

しかし本番の投票結果は、各メディア、各調査会社、そしてほぼすべての論者の予想を大きく裏切った。自由党が各社の直前予想をさらに一〇議席近く上回る三七議席を獲得し、第二党以下に大差をつけて第一党となったからである。投票日直前、各社は自由党の得票率として一七―一八%を見込んでいたところ、最終的な得票率は二三・五%に達した。全自治体の三分の二を超える自治体で自由党は第一党となり、南部のブラバント州のリユースフェンという小都市では、得票率が五〇%を超えた。

第二党は統一左派リスト（二五議席）、第三党は自由民主人民党（二四議席）、そして第四党は「新しい社会契約」（二〇議席）だった。この三党が選挙戦中に第一党を競い、ほぼ互角の選挙戦を戦ったあげく、自由党に最後に一気に抜かれたのである。

第五党以下の獲得議席はいずれも一桁である。連立与党を構成する中道左派のD66は前回二四議席を大幅に減らして九議席、同じく与党のキリスト教民主アピールは前回一五議席から五議席に沈んでいる。イスラム系政党のデルク（DENK）は変わらず三議席だった。

他方、前回一議席だった農民市民運動は七議席に伸びた。有権者は概して連立与党に厳しくあたり、新党や新リスト、そしてアウトサイダー政党たる自由党に強い支持を与えたといえる。

自由党の勝因

それでは自由党の勝因は何だったのか。⁽³⁾

第一の理由として広く指摘されるのが、移民難民問題が選挙の焦点となったことである。有権者の半数以上が、選挙で移民難民にかかわる問題を重視したとされ、しかも自由党の投票者の実に八〇%が投票理由として挙げたのが、移民難民問題だった。反移民、反難民で知られる自由党は選挙のイシューオーナーシップを握り、有利な立場で投票日を迎えたといえよう。

ただ、もともとこの選挙で移民難民問題がクローズアップされたのは、自由党というよりは、自由民主人民党側の戦略の「成功」の結果だった。先にみたように、ルッテ首相が内閣総辞職を決断した直接の契機が移民問題であり、最初から難民政策は争点化されていた。しかもルッテ後任のイエシルフースも移民難民に厳しい姿勢で選挙戦に臨んでいた。その点では、自由民主人民党の思惑通りに選挙戦が進んでいたはずであった。

しかし皮肉なことに、結果を見る限り、難民に否定的な有権者の支持は自由民主人民党を飛び越え、自由党に向かったようだ。

実は前回二〇二一年に自由民主人民党に投票した有権者のうち、一五%もの人々が今回、自由党に票を投じている。これは四―五議席に相当する。しかもこの有権者移動は、選挙戦の最終段階に生じたとみられている。なぜ移動が生じたのか。一つの有力な解釈は、人々の間で「右派政権を成立させる」ことを意図した「戦略的な考慮」が働き、自由党への投票に結び付いた、というものである。すなわち移民問題で厳しい対応を求める有権者は、自由民主人民党がたとえ第一党になったとしても、中道政党と連立した暁には難民政策が「薄まる」可能性

を懸念し、より厳しい対応を明言する自由党に戦略的に投票することで、(自由民主人民党を含む)右派政党側の優位を実現し、右派政権への道を開こうとした、ということである。

確かに選挙戦の終盤、オランダでは「戦略的投票」という言葉がメディア上で流布していた。これは主に左派系の有権者を念頭に、左派統一リストに左派系の票を集中させることにより、第一党の座を左派統一リストにもたらそうという意図で語られていた面が強かった。しかしこのことは右派についても当てはまる考え方であり、自由党に投票することで、結果として右派政権の成立を容易にすると理解された面もあったようだ。

ただ、自由党への投票が右に重心を傾け、右派政権の誕生を促すという「期待」が有権者にある程度共有されるという現象は、それまでの選挙ではほとんど考えられなかったことだった。それは二〇二三年選挙で特有に生じたことであり、説明が必要だろう。

今回、自由党を含む右派連立が現実的な可能性として理解されたまっかけとして指摘されるのが、自由民主人民党における、自由党への姿勢の変化である。二〇二三年八月、自由民主人民党のイエシルフースは、「自由民主人民党は自由党を「もはや排除しない」と発言し、自由党を連立相手として否定しない姿勢を見せた。ルッテ首相がそれまで一〇年にわたり、自由党を連立相手として一貫して排除してきたことを踏まえると、このイエシルフースの発言は一步踏み出すものだった。こうして自由党、自由民主人民党を含む右派連立政権の成立があり得る、というメッセージが有権者に伝わった結果、移民・難民制限に賛成する有権者は、「より信頼できる政党」として自由党を選択し、右派連立政権の成立を促した、ということになる。

実際、ある七〇歳の年金生活者男性は次のように語る。これまで、自由党に投じる票は「死に票 (een weggevoide stem) に過ぎなかった」。なぜなら、「他の政党がウイルデルスのことを排除していたからね」。しかし今

回、自由党が政権入りし、ウィルデルスが首相になる可能性が現実味を帯びてくる中で、これまでのように自由民主党に投票するのではなく、自由党に投票することに決めた、というのである。⁽⁴⁾

以上のことから、結果として自由党の支持拡大に手を貸したのはイエシルフースだ、という批判的見方がある。「イエシルフースは、自由党の選挙委員長となつてしまったのだ」というコメントもある。⁽⁵⁾

その当否はともかく、ルッテ退場後の流動化する政治情勢の中で、「自由党を含む右派連立」というオプションを含め、あらゆる可能性が浮上したのが今回の選挙だったことは間違いない。

自由党勝因の第二の理由として指摘されるのは、インフレと生活苦の広がりである。ウクライナ戦争などを契機としたエネルギー価格の高騰と生活費の上昇、住宅不足などの経済問題が人々の暮らしを圧迫し、特にそれが政権批判へと結びつき、「政権を真つ向から批判する」野党、とりわけ自由党への支持につながつたとされている。ウィルデルスは住宅不足の原因を、移民や難民を広く受け入れる現在の政策に求め、「難民ではなく人々の生活を守る」ことを選挙戦で訴え、支持を集めることに成功したといえる。

確かに左派統一リストの側も、野党として現政権の無策を批判し、最低賃金の引き上げなど、人々の生活を守るための政策を多数掲げてはいた。しかし環境重視の左派統一リストは、脱炭素化をはじめとして庶民に更なる負担を課すとのイメージが強く、EUと一体となつて環境規制を強化するエリート側の存在とみられた面が強い。選挙戦終盤のテレビ討論会で、ウィルデルスがテイメルマンスに対し、「あなたは七か国語を操ることができるはずだ。しかし人々の言葉をしゃべることができない」と皮肉交じりに述べたのは、左派統一リストの側の弱点を象徴的に示すものでもあった。⁽⁶⁾

このように自由党は、有権者における「移民・難民」流入への「不安」、生活上の「不安」をすくいとり、そ

れを政権批判、既成政党批判と結びつけることで、自党への支持に導いていったといえる。

とはいえずでに述べたとおり、直前まで自由党の予想獲得議席は二〇議席弱にとどまっておき、本番の投票で圧勝したのは、当日に至る数日間における、支持の急伸があつたからだつた。実際、多くのメディアは自由党の「ラストスパート」が最終的な勝因だつたことを指摘する。具体的には、投票日直前のテレビ放送の影響、特に「ニュースの時間」におけるウイルデルスのインタビュ、そしてSBS放送における討論会が決定的だつた、といわれている。これらの番組を通して有権者は、ウイルデルスへの見方を改め、妥協可能で現実的な候補者としてウイルデルスを認識し、もはや自由党への投票をためらうことなく実行できた、というのである。

他方、このような短期的理由とともに、長期的な背景を考える必要もある。ウイルデルスは二〇〇六年から下院に継続的に議席を持ち、すでに在籍期間が最長レベルのベテラン議員となつていことから、すでに「馴染み」が生じている面がある。特に新しく選挙権を得た若者にとつて、ウイルデルスの自由党は物心ついた時分から名を知っている政党として、違和感は少ない。自由党に票を投じたある一八歳の若者は、これまでの自由党をめぐる様々な騒動は昔の話であり、むしろ自由党こそが「政治的に正しい」と語る。またある二一歳のトルコ系男性は、庶民の暮らしに寄り添ってくれるのはウイルデルスだと考え、自由党に投票した。いずれもかつての急進的、こわもてな自由党イメージと異なるイメージが若い世代に持たれているように見える。

まとめていえば、自由党の勝因は、①設立後一七年が経過した「古株」政党として、有権者における違和感が徐々に薄れてきたという長期的な動向を背景とし、②ルッテ退陣で政界が流動化し、自由党を排除してきた有力政党（自由民主人民党）が自由党との連立の可能性を示唆し、自由党への投票が「死票」に終わらずに右派連立政権の樹立を促すものとして有権者に認識されるという新しい状況が生じ、③さらに近年の難民申請の急増、物

価値による生活苦が政権批判の高まりを招いたことで、一貫して反難民を訴える「セキュリティ」重視の自由党への支持につながったこと、④そして投票日直前のメディア報道により、ウイルデルスの「現実感覚」が有権者に肯定的に認識され、それが当日の自由党への投票行動につながった、ということになるのか。⁽⁷⁾

投票行動について

さて今回の自由党は、自由民主人民党以外にも多様な他党支持者から票を奪っている。たとえば二〇二一年選挙で民主フォーラムに投票した者の二九%、キリスト教民主アピール投票者の一二%が、今回は自由党に投票している。特に興味深いのが、左派ポピュリスト政党たる社会党支持者の動向である。前回選挙で社会党に投票した人のうち、実に一六%が今回、自由党に投票しているのである。

右派ポピュリスト政党と左派ポピュリスト政党は、一見すると主張は真逆であることから、この票の移動は奇妙に思える。しかし実は、自由党と社会党の支持者は、既成政治を批判し、社会経済的に左派、文化的に保守という点で共通しており、両者の距離は意外に近いのである。

それでは自由党の投票者は、どのような特徴があるのか。

今回の選挙についてみれば、自由党は「幅広く票を集めた」との評価がなされている。従来自由党については、高齢の白人男性の党というイメージが強かったが、年齢や性別についてみれば、そのステレオタイプは今回は当てはまらない。まず自由党は、一八―三四歳の若年層でも一七%の得票率で第一党となっており、投票者の平均年齢は有権者全体とあまり変わらない。また男女比は男性五三%、女性四七%であり、男性が顕著に多いとはいえない（たとえば自由民主人民党は男性六〇%、女性四〇%）。その結果自由党は、従来弱かった若者・女性にも支

持を広げること成功したといえる。⁽⁸⁾

有権者として初の投票を迎えた若者たちは、次のように語っている。まずある一八歳の男子学生は「ウィルデルスの主張ははっきりしていてわかりやすい」、「オランダ第一」であるのがよい、という。その一八歳の友人男子もまた、「移民政策を厳しくする時が来たと思う。もうすぐ家を出て部屋を借りるつもりなのに、このままだじゃ無理みたいだし」と同調する。なお、投票先指南サイト (stemwijzers) を利用する生徒は多く、それによって自由党に投票した者もいるようだ。

ただそれにもかかわらず、自由党の投票者に明らかな特徴があるのも事実である。具体的には、高学歴層が少なく、低学歴層がやや多いことが今回もあてはまる。高等教育修了者がオランダ全体で四〇%を占めるのに対し、自由党投票者における高等教育修了者は二四%に過ぎない。高学歴層における自由党忌避の傾向は、今も残っている。なお左派統一リストの方は、投票者の実に六二%が高学歴層であり、低学歴層はわずか一一%にとどまる。「学歴」が、自由党と左派統一リストという第一党・第二党を分かť分水嶺になっているといえる。

なお他の中道右派政党については、まず自由民主人民党は、全国的に得票率を落としている。「新しい社会契約」や農民市民運動に進出を許した結果、東部と南部における支持の下落が顕著である。二〇二一年選挙では実に二九〇もの自治体で第一党となったものの、今回は三〇程度にとどまった。

次に「新しい社会契約」は、東部、特にトウエンテ地方で強い支持を得て、初登場ながら二〇議席を獲得した。オントツイヒトの本拠地エンスヘーデにおける得票率は三割近くに上っている。支持者に多いのが白人の中高年であり、投票者の六三%が五〇歳以上である。前回選挙でキリスト教民主アピールに投票した人の三分の一が今回、「新しい社会契約」に投票したほか、左右の多様な政党から票を奪っており、オントツイヒトの幅広い人気

を示すものとなった。

さらに農民市民運動は、東部、北部の農村部で支持を集めた。当初はキリスト教民主アピール支持層を取り込んでいたものの、「新しい社会契約」結党後は支持を奪われ、最終的に前回キリスト教民主アピール投票者のうち、今回の選挙で農民市民運動に投票した人は六%にとどまった。

なお右派ポピュリストの小党であるB I J Iは、前回獲得した1議席を失った。前回投票者の多くが自由党に流れたとみられている。

議員団の顔ぶれ

今回自由党の大量当選により、自由党の新人議員が多数議員として登院することになった。計三七名の議員については、政治経験のある現職の市議員、州議会議員が多くを占めることが特徴である。⁹⁾ズーテルメール市やヘルデルラント州では、自由党の会派がそっくりそのまま国会に移行する結果となった。すでに地方議会や党活動において、ウィルデルスへの忠誠を示してきた者たちがほとんどを占める。そして新議員でSNS発信を行ってきた者の発信内容は、自由党の公式路線に沿うものばかりである。攪乱要因をあらかじめ排除し、党に忠誠を誓う「内輪」出身者を並べることで、ウィルデルスの意向に沿った党派運営を実現しようとしたことは明らかである。

ただ、数は少ないものの変わり種もいる。名簿三位に抜擢されたラヘル・ファン・メーテレンはその一人である。彼女は移動遊園地などの屋台業をなりわいとしているが、業界団体のリーダーとして政府に陳情を行うなど活発に活動し、自由党の目に留まったらしい。なお女性議員は彼女を含め七名に過ぎず、男性議員が圧倒的である。

労働党十グリーンレフトの左派統一リスト

では左派はどうだったか。左派統一リストの側では、選挙結果について、若干の喜びと強い衝撃が絡み合う、微妙な受け止め方となった。

労働党とグリーンレフトによる統一名簿という未知の世界に踏み出し、首相候補にティメルマンズという最適の人物を担ぎ出したことの効果は、確かにあった。二党の現有議席合計を上回る二五議席を得たことは、両党のいずれにとっても満足できる結果だったのである。

しかし第一党の座を自由党に譲り、しかも大差をつけられたことは、やはり衝撃だった。ティメルマンズは開票結果を受け、予想外の結果を残念としたうえで、個別の政党時よりも議席を増やすことができたが、「しかしそれは十分ではない」と評価した。「人々を十分納得させることができなかった」と振り返り、支持の広がりを欠いたことに無念さをにじませた。

特に左派統一リストにとって厄介だったのは、同じ中道左派勢力として協力関係にあり、連立相手として念頭におくD66が大敗したことだった。D66は他の連立与党と同様、既成政治不信の影響を受け、前回の一五〇万票を半分以下に減らす大敗北を喫し、九議席と一桁にまで落ち込んだ。D66は特に大都市圏で票を減らしたが、その多くが左派統一リストに回ったとみられている。そもそも左派統一リストへの投票者のうち、前回選挙で労働党とグリーンレフトの二党に投票していなかった有権者は、実に六六%にのぼるが、そのうち二九%は前回D66に投票した有権者であり、D66から左派統一リストへの大移動が生じたことが明らかである。

そもそも今回の左派統一リストの伸長の背景には、自由党と同様、有権者の側の「戦略的投票」があった。左

派統一リストの投票者の三分の一以上が、同リストを第一党に押し上げるため、「戦略的」に投票したとみられている。その結果、左派統一リストは、他の左派政党のほとんどから票を奪い、左派勢力で随一の勢力を確保することに成功した。

しかしその反面、他の左派や中道左派政党をすべて合わせても、左派統一リストが中核として過半数の議席を確保し、左派政権の樹立に動くことは不可能となった。

なお統一リストの投票者については、大都市部の高学歴層に多く、気候変動問題への関心が強いなど、従前のグリーンレフトの支持層に近い。特にアムステルダムで得票率が三割を超えるなど、都市部で健闘している（なお自由党はアムステルダムで得票率が一割程度に過ぎず、両党のアムステルダムにおける得票動向は全国的な動向と大きく異なっている）。これを受け、あるアムステルダムのグリーンレフト支持者は、「アムステルダム共和国を作つてオランダから離脱するしかないね」と自嘲気味に話していた¹⁰。

グリーンレフト系の支持者が統一リスト投票者の中核となったことは、候補者への投票行動からも明らかである。ティメルマンズは筆頭候補者であったにもかかわらず、彼個人に投ぜられた票は、左派統一リスト得票の四六・二％に過ぎなかった。この比率は、選挙参加政党のなかで最も低い。このことは、統一リストの名簿順位が2、3、5位の候補者（それぞれエスマー・ラーラー、イェッセ・クラーフエル、リサ・ウエステルフェルト）が多数得票した結果でもあるが、この三人はいずれもグリーンレフト出身者だった。グリーンレフトの支持者においては、労働党出身の筆頭候補者ティメルマンズではなく、なじみあるグリーンレフトのリーダーらに取って票を投じるケースが多かったといえよう¹¹。

さて選挙後の連立政権形成について、左派統一リスト側は静観する姿勢を見せた。ティメルマンズは、ウイル

デルスの自由党が穩健化すると思えず、自由党と連立を組む可能性はないと断言した。「自由党はオランダを排除する政党だからね」というのである。彼は自由党との対抗関係を念頭に、「今こそ民主主義と法治国家を守る」と呼びかけを行っている。

総選挙直後の各党の動向

総選挙の翌日以降、各党はそれぞれに衝撃を抱えつつ、連立政権協議をにらみ、方針を協議し公表していった。最大の焦点は、自由党が圧勝して第一党となったことを踏まえ、自由党・自由民主人民党・「新しい社会契約」三党（あるいは農民市民運動を加えた四党）の右派連立政権ができるかどうか、である。

まず自由党では、予想された通り、ウィルデルスが首相就任の希望を表明した。彼は「私はぜひオランダの首相になりたい」と明言し、「すべてのオランダ人の首相となる」と述べて他党の理解を求めた。特に難民制限の強化など、自由党には他党と一致できる政策が多いと主張した。

他方、自由党の連立相手として有力視される二党、すなわち自由民主人民党と「新しい社会契約」は、いずれも自由党から距離を置くコメントを発表した。

まず一月二四日、自由民主人民党の指導者のイエシルフースは、今回一〇議席減の大敗北を喫したことを踏まえ、会派の方針として「自由民主人民党は政権入りをするつもりはない」、「政策によって賛成することもある」とし、波紋を引き起こした。すなわち自由党主導の連立に参加する意思がないこと、自由党・「新しい社会契約」・農民市民運動からなる右派連立政権成立のあかつきに、閣外協力をを行う可能性があるとどまる、というのである。新政権成立まで暫定首相の座にとどまるルッテ首相はこの慎重な方針を歓迎し、「もったもな話

だ」と賛意を表明した。

また「新しい社会契約」では、オントツイヒトが「現段階では、自由党と交渉を開始する基盤がない」と明言し、やはり消極的な姿勢を見せた。「新しい社会契約」会派内では、ウィルデルスが投票日前に見せた「柔軟な姿勢」（コーラン禁止などの憲法違反の政策を「凍結する」用意があると述べたこと）について、必ずしも額面通りに受け取ることとはできないという意見が強く、それを受けてオントツイヒトは慎重な態度を示している。

他方、農民市民運動は連立政権入りに前向きだった。党首のカロリーネ・ファン・デル・プラスは、早くも選挙翌日二三日、自由党を含む連立政権に加わる用意があると明言している。なおそのさい、コーラン禁止やEU離脱など、「実現不可能な」政策についてウィルデルスが妥協することが条件としているものの、連立樹立に向けた積極的な姿勢は明らかだった。

中道右派政党の支持層の意向

このように、選挙直後の時点では、自由党の連立パートナーと目される自由民主人民党と「新しい社会契約」において、指導者層がいずれも微妙な態度を示しており、右派連立が自由党の目算通り進むかどうか、予断を許さない状況だった。

ただその一方、トップレベルの消極的な姿勢と支持層の意向の間に、少なからぬずれがあったことも事実だった。たとえば、Een Vandaagが選挙直後に実施した有権者調査によると、自由民主人民党や「新しい社会契約」の支持者層においては、指導者層と対照的に、自由党との連立政権の成立を支持する割合が高い。

たとえば自由民主人民党投票者においては、八四%が自由党との連立を「望ましい」とし、さらに六五%が

ウイデルスの首相就任を認めるとしている。また、「新しい社会契約」投票者の場合は八七%が自由党との連立を「望ましい」とし、七三%がウイデルスの首相就任を許容している。¹²⁾

自由民主人民党では、自由党との連立参加を拒むイエシルフースの方針への反対が、黨員レベルから寄せられた。選挙後、ユトレヒトで開かれた黨員集会では、「こんなことになるのなら、わが党に投票しなかったという人も多いのではないか」との発言もあった。また党の重鎮や著名人からは、イエシルフース批判が相次いで発せられた。たとえば元閣僚のハンス・ホーヘルフォレストとハルベ・ツェイルストラは、今後の選挙で発せられた「有権者の悲痛な叫び」に耳を傾けるべきとし、「今こそオランダは自由民主人民党を必要としている」と述べ、責任をもって政権入りに向けて動くべきと論陣を張った。¹³⁾

連立交渉へ — 連立見込検討者・プラステルク

さて下院では、規則と慣例に則り、連立政権の成立に向けた動きがさっそく始動した。ここで連立交渉の先導役となるのが、見込検討者（verkenner）である。見込検討者とは、選挙後の各政党における連立政権をめぐる意向を聴取したうえで、連立交渉に向けた大まかな見通しを立て、議会に報告する人物をさす。

通常、下院選第一党が連立見込検討者の人選を行い、議会の承認のもとで活動を始めることになっている。ただ今回、ウイデルスが当初指名した自由党のホム・ファン・ストリーンについては、彼がかつてユトレヒト大学関連の事業で不適切な取引をしていたことが暴露されたため、話はいったん振出しに戻る。

最終的に見込検討者としてウイデルスが目をつけ、選任されたのは、労働党出身のベテラン政治家、ロナルト・プラステルクだった。彼は教育文化科学大臣、内務大臣などの閣僚を歴任し、中道左派の元大物政治家とし

て幅広く信頼される人物であり、中立的な見込検討者として適任と思われたようだ。さらに「労働党」有力者のプラステルクが右派連立政権をまとめあげるのであれば、労働党による批判をかわせるとの思惑が働いた可能性がある。

とはいえ、現在の労働党を代表する存在としてプラステルクを見ることはできない。彼はかつて労働党閣僚でありながら、第二次ルッテ内閣で担当大臣としてブルカ禁止法を導入するなど、移民に厳しい面もある。また、ティメルマンズについて否定的な評価を述べたことがある。概して左派に批判的なスタンスで、自ら属する労働党について、「普通の人から遠い存在になってしまった」と評している。そもそも彼は、今回の選挙を受けて自由党・「新しい社会契約」、農民市民運動、自由民主人民党の右派四党による連立政権成立を期待するコラムをすでに書いており、その方向性はほぼ明らかだった。¹⁴⁾

一月二八日、会派代表が会合を開き、見込検討者として(ウイルデルスの提案した)プラステルクを任命することの是非を協議し、圧倒的多数の賛成で合意した(動物党とデンクの代表のみ、プラステルク任命に賛成せず)。下院議長のフェラ・ベルフカンプは、「幅広い政治的な基盤ができた」と絶賛し、プラステルクの活動に期待を込めた。ウイルデルスは「プラステルクは経験豊富で創造的な人材だ」と激賞した。

翌一月二九日、プラステルクは連立見込検討者として活動をさっそく開始する。各会派代表者と個別に会談し、意向聴取を進めていったのである。なおプラステルクは、会派代表者全員に会談の招待を送ったものの、デンクのみが「極右を利用するような連立見込検討の作業には協力できない」として拒絶している。

まず自由党のウイルデルスは、プラステルクとの会談後、自由民主人民党、「新しい社会契約」、農民市民運動との四党連立による多数派内閣の樹立に改めて意欲を示した。「論理必然的に右派連立政権ができるはずだ」と

いうのである。ただそれとともに彼は、閣外協力を得て少数派政権を成立させる可能性もあるとしている。

ただこの段階では、自由党との連立に前向きな農民市民運動を除き、中道右派政党的指導者層は、自由党との連立に慎重な姿勢に終始した。そのためプラステルクは予定期間内に活動を仕上げるができず、最終的に二月一日、右派連立政権樹立に向けた四党協議を今後進めるべきとする趣旨の報告書を報告した。¹⁵

この最終報告書、およびその後の説明においてプラステルクは、議会の大多数の政党の「意向」を反映しつつ、第一党である自由党を軸に連立政権を築いていく方向が望ましい、と提示した。彼は、「有権者はその意思を示した」とし、「再度の選挙に至るような事態は何としても避けるべき」としたうえで、右派四党により、憲法・基本権・民主的法治国家の擁護について合意を見出すべきこと、そのうえで移民や気候など、具体的な政策内容の交渉に入ることが望ましいと論じている。

なおプラステルクの連立見込検討にさいし、農民市民運動のカロリン・ファン・デル・プラスが助け舟を出している。彼女は、フレフォラント州の州政府の連立経験を参考にしてはどうか、とプラステルクに提案した。フレフォラント州では二〇二三年春の州議会選挙の後、農民市民運動に自由党を加えた大連立による州執行部が成立していたが、そのさい、連立に入る各党がすべて、マニフェストに署名し、「オランダの住民全員の権利保障」に明示的に賛同していたということがあった。ファン・デル・プラスはこの先例の「成功」を提示すること、で、「自由党を含む連立政権」が現実には可能であることを示そうとしたのである。

下院議長選

一二月一四日には、その後の連立形成の行方を占う下院議長選が、秘密投票で行われた。ここで議長に初当選

したのが、自由党のマルティン・ボスマである。ボスマは一四八票中七五票を得、二位のグリーンレフト・労働党のファン・デル・レイ（六六票）に九票差をつけて当選した。

自由党が第一党だったとはいえ、同党のボスマが当選を果たした背景には、下院における彼の長い政治経験があった。ボスマは二〇〇六年から一七年にわたり議員を務め、二〇一〇年から下院副議長の経験もあり、その配には党派を超えて一定の肯定的な評価があった。¹⁶

もともとジャーナリストとして活動していた彼が「右旋回」を果たし、ウイデルス率いる自由党に加わった最大のきっかけは、二〇〇四年のテオ・ファン・ゴッホ殺害事件だったという。かの著名画家、フィンセント・ファン・ゴッホの縁戚にあたる映画監督、テオ・ファン・ゴッホは、イスラム批判を前面に掲げた映画を製作したことで物議を醸し、イスラム過激派の青年にアムステルダムの上で殺害される。この事件は強い衝撃を国内外に与えたが、ちょうどボスマは事件直後の現場を目撃し、それが契機となって反イスラムの右派に転じ、自由党に加わったというのである。以後ボスマは、ジャーナリスト経験を活かし、ウイデルスに忠実な右腕、スपीチライターとして活動し、自由党の中樞を占めることとなった。

議長選に先立つ議会討論では、左派政党から強い批判が寄せられた。ボスマは議長として中立的に振る舞うことができるのか、自由党のメンバーとしてムスリムや移民の排除に与する立場ではないのか、などの厳しい質問が相次いだ。たとえばD66のヨースト・スネレルは、かつてボスマが二重国籍保持者の選挙権を剥奪する議員立法を提案したことを指摘し、「二三〇万人のオランダ人の基本権を侵害するものだ」と批判して、議長としての資質に疑問を呈している。

結果として左派勢力の推すファン・デル・レイには、左派政党から五〇票入ったほか、自由民主人民党、「新

しい社会契約」、キリスト教民主アピールからも一定の票が入ったものと思われる。とはいえ秘密投票によってボスマが七五票を得たということは、自由党が連立与党として見込む自由民主人民党、「新しい社会契約」、農民市民運動の議員の三分の二近くがボスマに支持を与えたことを意味し、自由党主導の政権樹立について、中道右派政党における抵抗感が少なかったことがうかがわれる。

自らに寄せられた批判を受け、ボスマは「議員としては党派的に振る舞ってきたが、議長としては中立を保つ所存である」と述べ、疑念の払拭に努めた。しかしその発言にふさわしく職務を遂行するのかどうかは、ボスマ議長の今後の議事進行ぶりをみて判断するほかない。

おわりに

オランダの有力紙NRCの政治担当記者、トム・ヤン・メウースは、今回の自由党の圧勝を踏まえ、「政治的中道が、今ほど弱体化したことはない」と評している。かつてオランダ政治の主役を張っていた五大政党が、いまやすべて合わせても六二議席に過ぎない。他方、急進右派が合計で四一議席に達している。そもそも過去五回の選挙では、毎回第一党が変わっている。有権者はあたかもバーゲンハンター（お得な買い物だけを狙う消費者）のようだ、と彼はいう¹⁷。

他方今回の選挙においては、「戦略的投票」という政治学用語がメディアで盛んに用いられ、そのことが有権者の意識に影響を与え、「合理的な計算に基づく投票行動」が広く行われた可能性もある。その点では、彼のいう「バーゲンハンター」との見たてでは、有権者を短絡的な存在とみなしており、やや単純化している感もある。もし有権者が「支持政党」に投票するのではなく、「最終的に成立する政権の構成」を念頭に置いて投票先を選

択したということが真実であるなら、それはオランダの有権者の「成熟」を示すという見方もできるだろう。とはいえそれが、中道左派の有権者における統一左派リストへの集中的な投票、中道右派の有権者における自由党への票の移動につながり、一種の「分極化」状況を生ぜしめ、旧来の中道政党をけちらしてしまったことは、皮肉な結果でもあったが。

いずれにせよトム・ヤン・メウースが指摘するように、今回の選挙はオランダにおける「戦後政治秩序の終焉 (het einde van de naoorlogse politieke orde)」を示すものなのかもしれない。今後のオランダ政治の展開、そしてEUとヨーロッパに与える影響を注視していくことが必要だろう。

【二〇二四年一月一〇日脱稿】

*本稿に引用されたインターネット上の記事については、最終閲覧日はすべて二〇二四年一月七日である。

*周知の事実や政治家の公的な場における発言、SNSにおける発信内容など、複数のメディアで同一の内容が確認できるものについては、典拠を個別に示すことはしていない。

(1) 自由党の大勝を受け、各国の急進右派ポピュリスト指導者たちはこぞつて祝意を表明した。マリーヌ・ルペンが「EUの機能に対し、一層の疑義が呈されている」と述べ、サルヴィーニは「新たなヨーロッパは可能だ」、スペインのVOXのバスカルは「より多くのヨーロッパの人々が、国民、国境、権利の保護を求めている」と述べた。*Financial Times* November 24, 2023. "Geert Wilders' win in Dutch election is a boon for Europe's far right." <https://www.ft.com/content/e7b7b93f-166f-4043-a1c4-a6943693633e> なお自由党は選挙綱領で、EU離脱の是非を問う拘束式の国民投票を実施することを掲げているが、選挙結果を受けて欧州委員会の広報官は、オランダは「EUの原加盟国」であり、「オランダがEUに積極的にかかわってく

れることを期待している」とコメントしている。

- (2) 二〇二三年オランダ総選挙に至る経緯について、詳しくは以下を参照。水島治郎「自由と寛容」をめぐるせめぎあいーオランダから考える」『世界』一九七五号、二〇一三年一月、一三二―一三七ページ。
- (3) NRC, 25 november 2023, “De rechtse kiezer, 60k die van VVD, swichte op het laatst massaal naar Wilders en bezorgde de PVV de grote winst.” https://www.nrc.nl/nieuws/2023/11/25/de-rechtse-kiezer-ook-die-van-vvd-swichte-op-het-laatste-massaal-naar-wilders-en-bezorgde-de-pvv-de-grote-winst-a4182241?utm_source=SIM&utm_medium=email&utm_campaign=Nieuwsbrieven&utm_content=nrcvandaag&utm_term=20231125
- (4) 自由党の投票者の特徴や有権者インタビュアーにインタビューした NRC, 25 november 2023, “Hoe de PVV deze week niet alleen groter, maar ook breder werd.” <https://www.nrc.nl/nieuws/2023/11/25/hoe-de-pvv-deze-week-niet-alleen-groter-maar-ook-breder-werd-a4182245>
- (5) NRC, 23 november 2023, “Wie bezorgde PVV de winst: Dlian Yesilgöz of Wilfred Genee?” <https://www.nrc.nl/nieuws/2023/11/23/wie-bezorgde-de-pvv-de-winst-dlian-yesilgoz-of-wilfred-genee-a4182043>
- (6) *Financial Times* November 24, 2023, “Geert Wilders: the anti-Islam leader vowing to ‘put the Dutch first.’” <https://www.ft.com/content/b0eedc72-b8344def-8c77-270b2b76832>
- (7) なお、しばしばポピュリスト政治家の躍進の際には、急進的な発言を繰り返す当該政治家にメディアの注目が集中し、それがさらなる支持拡大を招く現象がみられる。しかしオランダの有力紙NRCについてみれば、今回の選挙でそのような展開はみられないという。NRCのオンブズマンによると、選挙前二カ月、NRCの扱いは圧倒的に「新しい社会契約」のオントツイヒトに集中していた。すなわちオントツイヒトは一四九回登場し、テイメルマンズは一〇七回、イエシルフースが七四回のところ、ウィルデルスは六六回だった。ウィルデルスの扱いは、他の有力政党リーダーと比べても少なかったのである。NRC, 24 november 2023, “In de campagne schreef NRC ruim tweemaal vaker over Omtzigt dan over Wilders.” <https://www.nrc.nl/nieuws/2023/11/24/in-de-campagne-schreef-nrc-ruim-tweemaal-vaker-over-omtzigt-dan-over-wilders-a4182186>

- (10) NRC. 25 november 2023. "Hoe de PVV deze week niet alleen groter, maar ook breder werd." <https://www.nrc.nl/nieuws/2023/11/25/hoe-de-pvv-deze-week-niet-alleen-groter-maar-ook-breder-werd-a4182245>
- (11) NRC. 27 november 2023. "De PVV speelt op safe met een kandidatenlijst van loyale leden." https://www.nrc.nl/nieuws/2023/11/27/pvv-speelt-op-safe-met-loyale-leden-a4182480?utm_source=SIM&utm_medium=email&utm_campaign=Nieuwsbrieven&utm_content=nrcvandaag&utm_term=20231128
- (12) *Financial Times*. November 24, 2023. "Geert Wilders' win in Dutch election is a boon for Europe's far right." <https://www.ft.com/content/e7b7b93f-166f-4043-a1c4-a6943693f33e>
- (13) NRC. 29 november 2003. "Timmermans kreeg minder dan helft stemmen op zijn partij, kandidaten met GroenLinks achtergrond populair." <https://www.nrc.nl/nieuws/2023/11/29/timmermans-kreeg-minder-dan-helft-stemmen-op-zijn-partij-kandidaten-met-groenlinks-achtergrond-populair-a4182677>
- (14) *EenVandaag*. 23 november 2023. "Kiezers NSC, VVD en BBB vinden dat hun partij open moet staan voor kabinet met Geert Wilders, ook als hij premier wordt." https://eenvandaag.avrotros.nl/panels/opiniepanel/alle-uitslagen/item/kiezers-nsc-vvd-en-bbb-vinden-dat-hun-partij-open-moet-staan-voor-kabinet-met-geert-wilders-ook-als-hij-premier-wordt/?__cf_chl_tk=S8L1w1aUduSck50S95pp4Qks0JvGS63W8GJy_zY97B30-1700833497-0-gaNYcGzND2U
- (15) NRC. 26 november 2003. "VVD-leden roeren zich over gedoogrol Dlian Yesilgöz na 'noodkreet van de kiezer.'" <https://www.nrc.nl/nieuws/2023/11/26/vvd-leden-roeren-zich-over-gedoogrol-dlian-yesilgoz-na-noodkreet-van-de-kiezer-a4182306>
- (16) NRC. 27 november 2023. "In zijn column nam Ronald Plasterk al een voorschot op de formatie." <https://www.nrc.nl/nieuws/2023/11/27/een-oud-minister-die-in-columns-links-en-rechts-uitdeelt-a4182478>
- (17) NRC. 11 december 2023. "Plasterk: PVV, NSC, VVD en BBB kunnen verder praten over mogelijk coalitieakkoord." <https://www.nrc.nl/nieuws/2023/12/11/plasterk-pvv-nsc-vvd-en-bbb-gaan-onderhandelen-over-mogelijk-coalitieakkoord-voor-meerderheidscoalitie-a4183926>
- (18) NRC. 14 december 2023. "Keuze voor PVV'er Bosma als voorzitter weerspiegelt nieuwe verhoudingen in Tweede Ka-

mer.” <https://www.nrc.nl/nieuws/2023/12/14/keuze-voor-pvver-bosma-als-voorzitter-weerspiegelt-nieuwe-verhouding-in-tweede-kamer-a4184398>. *NRC*, 12 december 2023. “Als invallend Kamervoorzitter houdt PVV'er Martin Bosma gedachten over 'linkse elites' en 'multiculturalisme' voor zich.” [https://www.nrc.nl/nieuws/2023/12/12/is-de-voorzitterskamer-bij-](https://www.nrc.nl/nieuws/2023/12/12/is-de-voorzitterskamer-bij-martin-bosma-in-goede-handen-a4184075)

- (17) *NRC*, 24 november 2023. “De winst van radicaal-rechts maakt duidelijk: dit land is bezig zichzelf af te schaffen.” <https://www.nrc.nl/nieuws/2023/11/24/de-winst-van-radicaal-rechts-maakt-duidelijk-dit-land-is-bezig-zichzelf-af-te-schaffen-a4182159>